

資本主義はなぜ、集団スポーツを産んだのか (2/2)

内 海 和 雄*

目 次

1. 課題設定
2. 研究方法論：若干の前提
 - 2.1 運動欲求と文化的充足
 - 2.2 スポーツの誕生と本質
 - 2.3 余暇の所有
 - 2.4 スポーツの公共性
3. 資本主義とスポーツの発展：先行研究
 - 3.1 E・ダニング
 - 3.2 R・ホルト, JA・マンガン
 - 3.3 T・ヒューズ
 - 3.4 A・ヴォール
 - 3.5 A・グットマン
 - 3.6 T・コリンズ
 - 3.7 先行研究のまとめ（以上前号）
4. 封建制社会と「スポーツ競技会の消失」（以下本号）
5. イギリスの資本主義化
 - 5.1 マニュファクチュア化
 - 5.2 18世紀の5大戦争勝利と更なる資本の蓄積
 - 5.3 産業革命化
 - 5.4 創られた伝統
6. 「分業と協業」の発展
 - 6.1 道具と機械と身体
 - 6.2 マニュファクチュアから産業革命へ
7. 近代スポーツはなぜ、イギリスで発祥したのか
 - 7.1 近代スポーツの2つの範疇
 - 7.2 マニュファクチュア期：近代スポーツ誕生の第1期
 - 7.3 産業革命期：近代スポーツ誕生の第2期
 - 7.4 「分業と協業」と集団スポーツ
8. 資本主義はなぜ、集団スポーツを産んだのか
 - 8.1 「創られた伝統」としてのスポーツ
 - 8.2 ブルジョアの身体的・精神的要請との一致
 - 8.3 パブリック・スクールの役割

4. 封建制社会と「スポーツ競技会の消失」

資本主義の検討に入る前に、それ以前の社会とスポーツの関連について図表4のように簡単に触れたい。

人間は生物であるから何よりも食物の獲得を生活の基本とする。原始共同体における中心は植物の種や実の採集活動と、動物の狩猟である。行動範囲は狭いが敏捷な小動物狩猟の段階から、

図表4 スポーツと競技会の歴史

社会体制	スポーツ現象	備 考
原始共同体	スポーツの誕生 個人スポーツ	狩猟, 戦闘のトレーニング化+遊戯性 レスリング, ボクシング, 陸上競技他
古代奴隷制社会	スポーツ競技会の誕生 個人スポーツ	生産力の上昇, 権力の集中, 都市国家群の統合 (古代オリンピック他)+宗教儀式 レスリング, ボクシング, 陸上競技他
封建制社会	スポーツ競技会の消失 マーシャルアーツの誕生	一神教世界における精神優位・身体劣位
資本主義社会	スポーツ競技会の復興 個人スポーツ 集団スポーツの誕生	各 IF, オリンピック (脱宗教) レスリング, ボクシング, 陸上競技他 ラグビー, サッカー他

* 広島経済大学名誉教授

行動範囲の広く少々緩慢であるがより獐猛な大型動物の狩猟は、生産力の大きな向上である。そのためにより精巧な武器や組織的、集団的な捕獲方法が求められた。そのために人間はコミュニケーション能力を発達させた。時には動物からの逆襲もあり、仲間が犠牲になることもあったから、動物の弱点を知り、そこを集団的に攻める狩猟労働のトレーニング化が求められた。また当時の社会は近隣の種族を襲撃して略奪することも普通だったから、戦闘の準備もトレーニングとして不可避な課題であった。こうして狩猟労働や戦闘の準備としてのトレーニングは重要な課題となった。これらのトレーニングは次第に勝敗を競ったり、競技の面白さ、遊戯性が加味された。こうして「スポーツの誕生」である。種目は狩猟や戦闘に直結したレスリング、ボクシングなどの格闘技や走投跳を含んだ陸上競技などの個人スポーツである。

さて、古代奴隷制社会は階級社会の始まりである。一部の財産所有者が権力者となり、奴隷を支配した。財産と同様に社会の文化も全て支配階級に独占された。古代ギリシャ社会や古代ローマ帝国がこの時代の典型である。古代ギリシャではオリンポスの神々（多神教）への奉納としてオリンピックが4年ごとに開催された。当時の地中海地方では、毎年100近い競技会が国家行事として開催された。乱立し戦闘を繰り返していた都市国家群は周辺のペルシャやアフリカ諸国からの侵略に対抗する必要性から、これらの諸国家の統合の意味からもこれらの競技会は位置付けられた。こうして古代奴隷制社会は「スポーツ競技会の誕生」の時代である。しかし参加者は全て支配階級としての貴族であり、人口の多くを占めた奴隷階級は人権の対象外であり一切出場できなかった。行われたのは先の狩猟や戦闘に直結した個人スポーツであるが、古代ローマ時代になると富裕者たちが馬車競技などを導入した。が、いずれも個人スポーツで

あった。因みにローマの民衆の前で行われた見世物としての剣闘士（奴隷）同士の戦いはまさに生死をかけた戦闘であり、スポーツではない。

さて、封建制社会は、封土を領有する貴族（支配階級）とそこで支配される農工商とに分離する階級社会であるが、前半と後半では大きく性格を異にする。前半では奴隷制以降の農業社会であるが、後半には資本主義の前提となる農業の発達と海外貿易の開発など商業の発展によって都市が形成されはじめ、手工業も徐々に発達した。

宗教特に一神教の多くは「精神優位・肉体劣位」の観念を有し、精神は永遠に不滅で死後も宇宙を彷徨うが、肉体は限界を持ち死に絶えると考えた。キリスト教も同様であり、身体文化は蔑まれ、スポーツなどの運動文化もことごとく否定された。オリンピックはオリンポスの神々（多神教）への奉納行事であったから、古代ローマ帝国のキリスト教社会にとっては異教文化であった。それゆえにAD394年にその1200年の歴史が終了した。その他の競技会もことごとく否定され、封建制社会は「スポーツ競技会の消失」期であった。

しかし、封建制社会では、貴族を除けば栄養状態も十分ではなく、人口の大半を占めた農奴たちは、夜明けから日暮れまでの長時間労働の中で、十分な余暇を所有できなかった。貴族たちも肉体否定の宗教観によって、スポーツへの参加が制限された。しかも当時医学の水準は古代からあまり発展しておらず一度健康破壊、病気になるるとそれは命取りになりかねず、日頃から健康維持は重要な課題であり、養生訓のようなものが普及した。今から見ればかなり怪しい祈祷や民間伝承療法が流布した。一方、スポーツ競技会は消失したが、身体活動は多様な形態を採って日常生活に根ざしていた。民俗的ゲームも村祭りや国家的なイベントの折に開催された。

貴族層においては領地の検地、治安を兼ねた鷹狩り、狐狩り、弓射などが行なわれた。さらに宮廷内で始められたジュ・ド・ポーム（テニスの原型）等は、これまでの狩猟的、戦闘的種目よりは一段と遊戯性、文化性の高いスポーツを誕生させた。

下級貴族（騎士）は「騎士の7芸」といわれる戦闘活動を日常のトレーニングとした。戦闘の一環としてジュスト（馬上での1対1の槍試合）、トーナメント（集団的な馬上戦）他も試みた。これらは国王の前での命をかけた真剣勝負、戦闘行為であってスポーツではない。それでも銃の発明による近代戦法への変化により、「騎士の7芸」も衰退したが、後にマーシャルアーツとしてスポーツ化される剣術、棒術（日本ではさらに柔術、空手なども）発達した。

下級僧侶は日常の作業が重労働であり、特段にスポーツ的活動を必要としなかったが、高僧になるとそうした雑務もなく、運動不足になり、教会内でのスキットルズ（九柱戯：10ピンボウリングの原型）、ファイブズ（直角に交差する壁に手袋をはめてボールを打ち合う）などを楽しんだ。商人や職人たちは自衛組織を結成するまでになり、防衛のために射撃、フェンシングなどを嗜んだ。農奴たちは日頃早朝から日暮れまでの過重な農作業に追われ、十分な余暇も所有出来ず、余暇活動を享受できなかった。それでも、年一回の村祭りやキリスト教の催事で、民俗（原始）フットボールや力石や境内一周などの駆け足を競った。さらに日常生活では地域に密着した土着的民俗ゲーム（闘鶏、熊追いなど）や素手ボクシングなどのブラッドゲーム他が普及した。非支配階級には文字の習得や組織の結成は謀反計画として許されず、教育もなされず、恒常的な余暇享受は不可能であった。

催事には民俗フットボールも行われた。多くは自然発生的で参加者は登録されたわけではなく、意志のある者は合流した。日頃の鬱憤を晴

らす絶好の機会ともなり、時には度を超して領主の館への侵入、焼き討ちとなり暴動化した。そのため、1314年以降、数10年単位で禁止令が発せられていた。ということは逆に見れば、そうした禁止令はあまり効果は無かったと言うことでもあり、普及度が高かった。民俗フットボールは他の個人スポーツ、ゲームに比べると「集団スポーツ的」な要素を持っている。しかし、これはルールもなく、烏合の衆の対抗であり、かなりの野蛮さ含み、近代スポーツとは明らかに異なっていた。とはいえ、この民俗フットボールは19世紀中頃から誕生するサッカーやラグビーの源流となった。その理由は後述する。

封建制の末期になると航海術の向上によって国際交易も進展し、国内の商業も発展し始めた。社会の変動が起き始めたのである。そうした近代化、資本主義化の中で、1612年、イギリス・コッツウォルト地域のチップングカムデンでは土地の名士R・ドーヴァーによって「ドーヴァー・オリムピック Dover Olimpick」が開催された（2日間）⁴⁵。この背景には地域の安寧を意図して、名士（地方貴族、ジェントリー）が地域領民の大会を組織したり、高位の者が下位の者への施しをすることが美德（ノーブレス・オブリッジ）と考えられていた。当時、類似した大会が少しずつ開催されていった。こゝで行われた種目は競走、跳躍、ハンマー投げ、槍投げ（的当て）、レスリング、フェンシング、ダンス、木剣、すね蹴り、ハンティング他、もっぱら個人スポーツであった。当時、近代的な集団スポーツは未だ誕生していなかった。この大会も1850年前後になると、その名声を聞きつけて、また普及しつつあった鉄道を利用して全国からの参加者があった。近隣の産業都市バーミンガムには産業革命でアイルランド移民労働者が多数在住し、彼らの多くも参加した。次第に規模が大きくなりすぎて治安上の問題も起きたり、近隣の村の対抗意識の過熱化により

統制がとれなくなった。このドーヴァー・オリンピック以降、「オリンピック」と称された大会が多く開催されるようになった⁴⁶⁾。

5. イギリスの資本主義化

イギリスは、経済的に最も早く資本主義化を達成し、それに伴って政治的、社会的、思想的、文化的そして軍事的な改革をもたらした。その一環に「近代スポーツがイギリスで発祥した」。それと近似的である「資本主義はなぜ、集団スポーツを産んだのか」という問いもイギリスでの事象である。フランスも含めた他のヨーロッパ諸国との関係も重要であるが、本項ではイギリスの資本主義化の経済的、政治的、社会的、思想的、文化的視点をマニファクチュア期と産業革命期とに区分して展開する。それは「近代スポーツの発祥」と「集団スポーツの誕生」にとって、それぞれの社会的基盤となるからである。

5.1 マニファクチュア化

封建制下の問屋制手工業では問屋（商業資本家）が個々の農奴（半農半労）の家を回って原材料を配布した。そこでは徐々に始まりかけた分業により部品が生産された。問屋はそれらの部品を回収し、他の農奴に配布して完成品を作り上げた。「分業＋非協業」である。しかし1550年代中頃からイギリスは大陸諸国に先駆けてマニファクチュア（工場制手工業）を発達させた。未だ手工業ながら、同じ敷地内の工場に集まって労働し始めることにより、孤立した単独労働よりも移動の節約と集合効果による生産意欲の上昇をもたらした。これは海洋国として海外との交易が多く、国内生産への刺激が高かったからである。これによって問屋は一定の資本が必要となり、集積した労働からの搾取が始まった。資本主義の始まりである。

マニファクチュアによって商業資本家たち

が財をなし、実権を持ち始めると、旧来の封建領主（貴族や上級ジェントリー）たちとの対立を生じるようになった。とはいえ商業資本たちの中には貴族志向を強く持ち、ジェントリー化した者も多くいた。17世紀に起こったピューリタン革命、名誉革命は質素、儉約を信念とするプロテスタント（ピューリタン、清教徒。商業資本家やジェントリーの多くが参加した。）によって担われたが、両革命は一括してイギリス革命と称される。新興市民（資本家）の人権など市民社会の原則を確立して、政治的には議会政治のもとで立憲君主制を樹立した。こうして封建制の身分制に対するブルジョア民主主義が優位を占めていった。フランスをはじめとする大陸では未だ封建制下の厳しい主従関係にあった状況に比べると、イギリスは都市も農村も市場化が進行し、封建領主の拘束も比較的緩やかだった。この時代が、先述のN・エリアスの近代化の背景である。

5.1.1 イギリス革命

5.1.1.1 ピューリタン革命

1642年、議会派と王党派の内戦が勃発した。国王の圧政に反発して議会派を構成したのはジェントリーの中のピューリタンの人々であり、ヨーマンと言われた広範な自営農民がその戦力となった。王党派は大貴族、大商人、ジェントリーの中の大地主から構成されていた。指導者クロムウェルが議会派の主導権を握り、王党派の国王軍を破った。そして王政に変えて共和政を実現させた。これがピューリタン革命である。しかしクロムウェルはやがて独裁化し、アイルランド征服やスコットランド征服等植民地支配を試みた。

5.1.1.2 名誉革命

1688年、ジェームズ2世がカトリック復帰を画策したことに抗して、議会はトーリ党とホイッグ党が協力してジェームズ2世を排除し、オランダから新たな国王を迎えた。そして「権

利章典」を公布して、立憲君主制を実現させた。これが名誉革命である。

絶対王政下で商品流通が大きく発展し、商業資本家が実権を持ち始めていたが、ジェントリーとなって貴族化する者もいる中で、封建制の廃止は徹底されなかった。彼らはノーブレス・オブリージとして、領民に施し物を与えたり、地域の無給の治安判事を努めたり、流動化しつつある領土、地域の安定化に注意を払った。当時の重商主義は輸出を中心とした貿易を重視したが、このことがやがて生産能力のいっそうの向上を要請するようになり、産業革命への地盤となった。

5.1.2 市民革命

新たに台頭した資本家階級が封建制や封建領主に対して労働力の移動、流通、私的所有の自由など資本主義的自由を求めた革命であり、市民社会が形成された。1600年代後半には、J・ロック（政治思想家）が活躍した。彼は社会契約論や抵抗権などを展開し、新興のブルジョアジーの代弁者となって権利章典（1689）のみならず、約100年後のアメリカ独立宣言（1776）やフランス人権宣言（1789）にも影響を与えた。

5.1.3 科学革命

このマニュファクチュア期（16世紀半ば～18世紀後半の産業革命期の始まりまで）は科学革命とも言われた。顕著な例を挙げると、先ず医学では長い間古代ギリシャ以来の4体液（血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁）に基づく人間の病疫説に根本的な変換を迫ったW・ハーベイの血液循環説が1628年に発表され、近代医学への幕開けとなった。自然科学では1662年にイギリス王立協会が設立された。（自然科学の殿堂として現在も機能している。）その年、R・ボイルによって、一定の温度の下では気体の体積はそれへの圧力に反比例するという「ボイルの法則」が発見され、1665年にはI・ニュートンが「万有引力」を提唱した。地球上の引力と同様な力

が他の天体に対しても作用をもたらすという理論である。その他、多くの分野に科学者が誕生し、自然法則が発見された。

5.2 18世紀の5大戦争勝利と更なる資本の蓄積

18世紀は戦争の世紀でもあった。この時期の5大戦争のうち、イギリスが明らかに防衛的であったのはアメリカ独立戦争だけであった。この継続的な戦争の世紀の結果は、いかなる国によってもなしえなかった最大の勝利であった。すなわち、海外植民地の事実上の独占と世界的な規模での海軍力の独占であった。つまり、世界の富を独占したのである。

5.2.1 スペイン継承戦争（1701-14）

スペインのハプスブルク朝断絶に伴う王位と領土の継承をめぐる戦争であり、戦場は列強を巻き込んで大西洋にまで拡大し、近代最初の「世界戦争」になった。イギリス・オランダとスペイン・フランス間の戦争となり、奴隷貿易権がスペインからイギリスに移った。

5.2.2 オーストリア継承戦争（1740-48）

ハプスブルク家の王位と領土の継承をめぐる争われた戦争で、フランスはプロイセン側につき、イギリスはオーストリア側についた。戦場はアメリカにまで及び、次の七年戦争への火種を残した。

5.2.3 七年戦争（1756-63）

フランス、ロシア、オーストリアと、プロイセンとの間で闘われた戦争であり、イギリスは後者と同盟を結び、フランスの植民地勢力に対して完勝した。イギリスは莫大な利権を獲得し、これまでの科学革命に基づく技術革命、すなわち産業革命を推進する資金源を形成した。

5.2.4 アメリカ独立戦争（1775-83）

アメリカがイギリス本国に独立を承認させた戦争である。1776年に、アメリカ独立宣言が出され、自治権を主張した。戦争は1783年まで続いた。

5.2.5 ナポレオン戦争（1793-1815）

フランスの総裁政府から第1帝政の時期に掛けてナポレオンが指揮した戦争である。当初は防衛の手段であった革命戦争は次第に侵略戦争の性格を持つようになった。1805年、スペイン沖のトラファルガー岬沖で、イギリス艦隊はフランス／スペイン連合軍を破り、イギリスへの侵攻を防いだ。1815年のワテルロー（ベルギー）でイギリス軍とプロイセン軍はナポレオンを破り、ナポレオンは退位した。またこの一連の戦争を契機としてヨーロッパ諸国は封建支配からの解放を獲得した。

これらの戦争は商業化が進んだイギリス中産階級の海軍に支えられて、国内産業の技術革新と工業化を促進した。商業と海運がイギリスの国際収支を維持し、海外の一次産品とイギリス工業品との交換がイギリスの国際経済の基礎となった⁴⁷⁾。市場経済の発展が、農村さえも貨幣取引の網の目の中に絡み込ませており、茶、砂糖、タバコのような完全な輸入商品の使用も増えていた⁴⁸⁾。

5.3 産業革命化

「世界の唯一の工場、その唯一の巨大な輸入業者、その唯一の運送業者、その唯一の帝国主義者、その殆ど唯一の海外投資国、そしてそれ故にその唯一の海軍強国、真の世界政策を持つ唯一の国と呼んで良いような時期が、世界史にはあったのである。」⁴⁹⁾ それが1770年代以降の産業革命を経験しつつあった大英帝国である。

マニュファクチュアを経て、産業革命によって産業構造を機械制大工業に発展させた。それは社会構造（社会組織、社会規範、社会倫理他）をよりいっそう複雑な組織社会へと根本的に変化させた。都市工場の誕生・発展と共にエンクロージャーで土地を追われた大量の農民が職を求めて都市に集中した。それによって伝統的な農村文化が崩壊した。その一環として民俗ゲー

ムが消滅した。一方、都市では工場の職場組織の新たな編成と地域の再編成、国の経済、社会の総ての新たな組織化が問われた。また密集地はスラム化し、伝染病や犯罪の温床となり、新たな文化の創造地とはなりえなかった。それらは社会規範、社会倫理面でも大きく変化し、これまでの農村的なゆったりとした時間観念から都市的な正確な時間厳守やスピーディーな行動を必須とする近代的な労働者の育成が必要となり、経営者も近代経営の方法を強く求められた。

先行した科学革命が自然や人体の摂理の発見であるとすれば、産業革命とはそれらを技術の改善に結合して、生産力の向上に結合し、社会の変化を大きく進めた技術革命である。労働形態から見れば既述のように、封建制での独立分業、「単純協業」を経て資本主義化であるマニュファクチュア（工場制手工業）へ移行した。そこで労働者は同一の作業を繰り返すことにより作業効率は上昇し、生産性が向上した。この作業はやがて熟練労働者を養成すると共に、その道具を専門化して機械の発明を促した。この機械が科学革命に支えられて技術革命をもたらし、産業革命として開花した技術的側面である。

産業革命は先ず綿工業で起きた。輸出の拡大で紡績の生産性の向上が強く求められ、そこで生まれたのが紡績機であり、1770年代からの産業革命を牽引した。ハーグリーブズの多軸紡績機（1764）、アークライトの水力紡績機（1769）、クロンプトンのミュール紡績機（1779）へと改善は急速度で進展した。そしてその糸を織るカートライトの力織機（1785）の改善も相次ぎ、より生産性の高い機械が生まれた。

その機械を動かす動力源での発展も著しかった。蒸気機関の発明である。人力に代わって蒸気の力を活用した。1765年にはJ・ワットがシリンダーと冷却器を分離して、動力機の機能は一段と増した。蒸気機関の発達は運輸面での革命をもたらした。ステューブソンは1814年に

ワットの蒸気機関を活用した機関車を作成し、1825年には初の旅客用蒸気機関車を走らせた。イギリスは1840年代には鉄道の時代に入り、各地に鉄道が敷設された。こうして人々と情報の交流を促進した。産業と輸送の発展はますます都市への集中を促進した。

産業革命を牽引した繊維工業も極限に達していた頃、これに代わり経済成長にとって遙かにしっかりした基礎をもたらす鉄道建設の時代が到来した⁵⁰⁾。1830年から1850年に至るまでにおよそ6,000マイルの鉄道がイギリスに敷設された。それらの大部分は建設活動を伴った集中的な投資の異例な二大活況—1835～7年の小規模な「鉄道マニア」と1845～7年の巨大なそれ—の結果であった⁵¹⁾。こうしてイギリス人の生活は根本的な変化がもたらされた。この鉄道建設にはアイルランドから多量の移住労働者が招集され、彼らはやがてイギリス産業都市に定住した。

5.4 創られた伝統

急激な社会の変化の中で、近代スポーツが産まれてきたが、その発祥を見る上で、歴史における「創られた伝統」ないし「伝統の創造」を見ておきたい。近代スポーツの誕生もその範疇に入るからである。

「創られた伝統」とは、「顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の習慣および、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質」⁵²⁾である。特に「19世紀の社会変化についての自由主義的観念は、伝統に意識的に反対し、急進的に改革に与することによって、以前の社会では当然とされた社会的絆や権威の絆を体系的に禁じてきたのであり、その結果、作られた空間は作り出された慣行によって満たさなければならなかった。」⁵³⁾これは新興ブルジョアジー（産業資本家）が貴族・ジェントリーの旧文化

（伝統）を拒否すると同時に、一方では独自の文化を必要としたことを意味している。これをスポーツに適用してみると、後に触れるように旧文化である民俗フットボールの粗暴さを否定する一方で、その非暴力化への改変によって新たな伝統としてのフットボール（ラグビーやサッカー）の創造に導いたことである。

特に、1877～1914年はイギリスばかりでなく大陸諸国でも「創られた伝統」の最盛期であった⁵⁴⁾。ここではメディア（新聞他）の発達も大きな背景となった。この点で、1840年代以降のパブリック・スクールにおけるフットボールのルール化は最盛期の先鞭を採るものとなった。

6. 「分業と協業」の発展

既述のように1550年代から1760年代まではマニュファクチュア期（工場制手工業）であり⁵⁵⁾、手工業ながら工場化し、生産の資本主義の誕生をもたらした。やがて機械化と大工業化の産業革命へと発展した。このマニュファクチュアと産業革命の発展をもたらしたものは何なのか、資本主義の発展を基底的に支えた要素とは何なのか。それは「分業に基づく協業」（以下、「分業と協業」と略す）である。資本主義以前にも独立、分散した分業は存在した。商人がそれらを回収し、さらにはそれらを別の職種の家配達して最終的に完成させていた。個々の労働は分業化が進んでいたが、異なる職種は別々の家で行われた。そのため生産は大きくは発展しなかった。しかしマニュファクチュアは未だ手作業だが、同一敷地の工場に一堂に会して分業的作業を行い、それを隣にある別の職種の分業によって最終的な商品に仕上げるようになった。こうして分業が集合して協業が行われるようになった。「分業と協業」は資本主義化であり、資本主義の生産の基盤である。

ここで、分業と協業について簡単に検討しておこう。製造工程が多くの単純な労働に分割さ

れ、労働者はその分割された労働に専門的に配置される。これが分業である。労働者は同じ狭い作業を繰り返し行うから熟練し、その結果生産力が上昇する。その一方で、同一の生産過程において、または相異なっているが関連のある諸生産過程において、計画的に相並び、相協力してそれら分業で創られた部品を総合して商品を完成させる作業を協業という⁵⁶⁾。つまり、マニュファクチュア以降は、分業と協業は作業の同時的過程である。協業によって労働者達の集積効果、つまり集団力や競争心が発生し、また部品の移動コストは最小限化されて生産力は上昇し、生産コストは削減された⁵⁷⁾。

工場内での「分業と協業」は生産過程をより複雑化、高度化、効率化して直接的に生産力を上昇させるが、それはすぐに近接の関連領域に普及する。そしてその「分業と協業」は工場内に留まることなく、工場外へ出て、社会的な分業と協業を促進する。マニュファクチュア的分業は、資本家の手中所ける生産手段の集積を前提にし、社会的分業は、多数の相互に独立した商品生産者の間における生産手段の分散を前提する⁵⁸⁾。つまり、封建制下で長い間停滞してきた生産体制に「分業と協業」が浸透するにつれて工場内の労働様式が劇的な変化を遂げた。それと共に、そうした生産体制は社会のシステムにも「分業と協業」をもたらした。社会組織の複雑化、スピード化をもたらした。これらの労働過程（産業化）と社会組織（都市化）の根本的な変化はそこに生きる人間性にも変化をもたらした。

封建制の末期から資本主義の初期に掛けて、生産力が高まると商業の発展と共に商業資本家の成長を促した。彼らはジェントリーとして旧貴族層への同化を志向した。そして旧貴族と共に独自の文化を求めようになった。しかし、新たな文化の創造を成し遂げることなく、結局は伝統的な民俗ゲームの支援を行い、また自ら

も参加した。

「分業と協業」による社会の変化が新たなスポーツの誕生をもたらすには、今しばらくの「分業と協業」の発展とその工場内と社会全般への影響（産業革命化）と、そしてブルジョアジーの教育要求を実現させるパブリック・スクールでの教育改革を待たねばならなかった。ともあれ、「分業と協業」の進展は工場内の生産体制の変化ばかりでなく、社会全般の変化、組織化が促進された。そうした生産体制の優位性は業界の競争のみならず、その社会の社会規範を形成して、社会の全般に「分業と協業」の影響を与えたのである。時代は協業による集団力の形成を期待し、要請した。

6.1 道具と機械と身体

「道具にあつては人間が動力であり、機械にあつては、動物、水、風などのような人間力とは異なる自然力が動力であるということに、道具と機械との区別が求められる。」⁵⁹⁾ マニュファクチュア期は初歩的な「分業と協業」が導入され、労働それ自体は道具を使った手作業であった。しかし産業革命は機械がそれに代わった。ここに両者の根本的な差異がある。そして「すべての発達した機械装置は、3つの本質的に異なる部分から成る。動力機、配力機構、道具機または作業機である。動力機は、全機構の原動力として作用する。それは、蒸気機関、熱機関、電磁気機関などのように、それ自身の動力を産み出すか、または、水車が落水から、風車が風からというように、外部の自然力から原動力を受け取る。配力機構は、筋動輪、動軸、歯車、回転軸、鋼、調帯、小歯車、各種各様の連動装置から構成され、運動を調節し、必要に応じて運動の形態を、例えば垂直運動から円形運動に変じ、それを道具機に分配し、伝達する。機構のこの両部分は、道具機が労働対象を捉えて、これを目的に合致するように変化させよう

に、道具機に、運動を伝えるためののみ存在する。機械装置の道具機こそ、18世紀の産業革命が出発したものである。』⁶⁰⁾

ここに示されるように、マニュファクチュアは工場制手工業として、手作業であり道具の時代であり、動力も作業機も人間の筋肉が直接的に活用された。生産は人間の筋肉、労働に合わせて行われた。そのため、資本家による搾取が進み、長時間労働が進行しつつあったとはいえ、いまなお牧歌的な状態にあったのである。

一方、産業革命は機械制大工業であり、動力は動物、水（蒸気）、風、電磁気などであり、それが配力機構を通して道具機（作業機）に運ばれ、そこでの労働は人間の筋肉ではなく、機械に置き換えられる。高度に開発された「分業と協業」の体制の下で、生産は機械に合わせて行われ、生産性、搾取率を上げるために、スピードアップと一層の協調性が求められる。ここでの身体は熟練を要せず、女性労働、児童労働でも活用出来る。こうしたスピード化に対応する身体、時には職場の移動による異職種への従事のために新たな資質の身体と組織体制が要求された。

以上のように、同じ資本主義下であっても、マニュファクチュア期と産業革命期とではその「分業と協業」が根本的に異なり、より複雑に、高速になった。そしてそれは社会的な組織状況も反映しながら、異なった身体運動の形式を求めた。

6.2 マニュファクチュアから産業革命へ

マニュファクチュアも産業革命もそれぞれに「分業と協業」で支えられているが、前者は未だに手工業に依存しており、後者は機械工業生産であることは述べた。労働、生産の場も前者は主として農村であるが、後者は徐々に都市化の過程であった。この過程は農村の崩壊と共に都市の混乱も同時的に生じた。つまり、農村は

エンクロージャー、農民の都市への追い出しによって崩壊していった。これは伝統的な農村文化、地域文化の崩壊でもあった。一方、都市も農村からの労働者によってスラム街が形成され、長時間労働、機械による単純労働、都市近郊の工場化、オープンスペースの消失などによって、都市文化も未形成であった。こうして、農村も都市も崩壊状態で文化全般が衰退したのである。

ともあれ、封建制下の比較的安定し、停滞した社会がマニュファクチュア化によって流動化を始めた。資本主義化であるが、旧貴族やジェントリー、商業資本家は「レジャー階級」を形成し、民俗ゲームやスポーツに参加すると同時に、ロンドンにも出向き、都市のエンターテインメントの発展を支え、16世紀の中頃からは温泉の普及にも関わった⁶¹⁾。

19世紀初頭になると、帝国主義化の中で「男性性 (Manly)」が強調され、ナショナリズム (愛国主義) と結合された⁶²⁾。19世紀末に大英帝国のアスレティシズム、男性的キリスト教 (Muscle Christianity) の下で、スポーツのナショナリズム化と女性蔑視観が形成されたが、「男性性」はその下地となった。

そして産業革命期になると、労働ばかりでなく生活のあらゆる場面が多忙化、スピード化し始めた。1800年代初頭の産業革命初期には労働者の増大に伴って農村崩壊、都市の混乱は続いたが、1850年代に入ると、つまりヴィクトリア朝中期になると鉄道や新聞の発達によって労働者の生活も少しずつ流動化を増し、上昇し始めた。都市ではパブ、コーヒーハウスも生まれ、雑誌、新聞も発行されるようになった。パブは政党の組織化の拠点になったり、スポーツ大会の組織本部になったりもした。この時期、近代化の要因として「野蛮脱却」で批判されてきた民俗フットボールは若干の地域とパブリック・スクールを除いてことごとく消失していった。図表5は「分業と協業」と集団スポーツの誕生

図表5 「分業と協業」と集団スポーツの誕生

	封建制社会	資本主義社会	
		マニュファクチュア 1550s ~1770s	産業革命 1770s ~1870s
	農村型家内工業 分業と回収	工場制手工業 分業と協業（低位）	機械制大工業 分業と協業（高位）
生産具	手動・道具	手動・道具	機械
動力源	人間	人間	自然力（蒸気，水他）
生産向上	熟練+長時間	熟練+長時間	長時間+高密度
スポーツ	ブラッド・スポーツ 民俗フットボール	野蛮脱却・レジャーの拡大	
		ブラッド・スポーツ 民俗フットボール 貴族スポーツ 競技会の復活	集団スポーツの誕生（1840s ~） （1860s ~）スポーツ組織の誕生

に関するこれまでの議論を表にしたものである。

7. 近代スポーツはなぜ、イギリスで発祥したのか

7.1 近代スポーツの2つの範疇

以上の経過から浮かび上がるのは、近代スポーツとは、2つの範疇から成り立っていることである。1つはマニュファクチュア期を第1期とする貴族スポーツと民衆の民俗ゲーム（民俗フットボールを含む）であり、もう1つは産業革命期を第2期とする集団スポーツの誕生である。マニュファクチュア期と産業革命期のそれぞれの「分業と協業」の質的な差異とそれが与える社会的な影響によって、異なる近代スポーツの範疇を作り出したのである。従来はこの点が曖昧であり、ある意味では渾然一体となって総称的に「近代スポーツ」と称されてきた。しかし先にA・ヴォールが指摘したように、2段階の差がある。

7.2 マニュファクチュア期：近代スポーツ誕生の第1期

マニュファクチュアの進展によって勢力を増しつつあった新興の商業ブルジョアジーは貴族・ジェントリーに同化する者もいた。ピュー

リタニズムを信奉する者もおり、貴族らの華美を嫌い、質素、儉約、質実を誦い、日曜日は教会での礼拝を重んじ、民俗ゲームを否定した。しかし主流の貴族・ジェントリーは資本主義化により活性化、流動化の一方で不安定化する地域社会の安定化を意図して、ノーブレス・オブリージによって住民を対象とした競技会などを組織するようになった。こうした中で、封建制時代では恒常的に出来なかった先のブラッドゲームや民俗ゲーム、民俗フットボールなどを支援した。それらは、農村での労働力確保のための妥協であったとも言われる⁶³⁾。さらに、マニュファクチュア化で流動化し始めた労働力の確保と、社会の不安定化を予防する社会統制を維持する方策でもあった⁶⁴⁾。

18世紀中盤までのマニュファクチュア期、それらのゲームは宗教的儀式や農事のカレンダーと結合した諸催事に行われた。封建制の名残としての性格が強いが、貴族・ジェントリーは新たな文化として貴族ゲーム（鷹狩り、狐狩、射的他）を積極的に享受すると同時に、既述のように農民たちの民俗ゲームを支援した。特にボクシングはその凶暴さを克服して、素手からグローブを用いるようになり、試合時間数の制限など、近代化を始めつつあった最初のスポーツ

である。また、闘鶏や牛追いも含めて、時には貴族・ジェントリーと農民が一緒にゲームに参加することもあった。階級融合が可能な時代であった。これらが、貴族・ジェントリーの「創られた伝統」「伝統の創造」であり、近代スポーツ誕生の第1期である。

先述の様に、1612年にコッツウォルト地方（イングランド）のチップングカムデンでドーヴァー・オリンピックが開始された。当時の貴族・ジェントリーであるR・ドーヴァーが、ノーブレス・オブリージの一環として地域の安定化のために開催したものである。

都市部の労働者の生活も大分荒れており、怠惰、浪費、酩酊、放蕩など社会不安の大きな原因となっていた。このような中で、彼らに労働規律を与え、多少の息抜きを与えるためにも、こうした娯楽の提供が必要であった。「産業組織がしだいに複雑化するにつれ、それに応じて民衆の余暇における伝統的娯楽の多くが削減し、それでも残った娯楽を効果的に規制することが、雇用者たちにとっての産業規律のコードの基本的な要素となっていった」のである⁶⁵⁾。

一方、議会主義化、民主主義化が進むにつれて、これまでの暴力的行動への社会的批判（野蛮脱却）はますます強まり、18世紀末の産業革命に至る頃にはそうしたブラッド・スポーツ、民俗フットボールなどは一部地域とパブリック・スクールを除くと、多くの地域から消失していった。そしてブラッドスポーツへの反対は1800年代初頭に高揚し、1840年代までには多くが完全に消滅した⁶⁶⁾。民俗フットボールが街路で行われた場合、通行人をも巻き込み、また商店街を破壊し、町の治安を乱した。これに対し、住民からの休止の訴えに基づき、警察や時には軍隊を動員してのフットボール禁止、抑圧行動も頻繁に採られた。

資本主義の矛盾特に都市の労働者階級の環境と生活の貧しさが激しくなると、中産階級を中

心にプロテスタントの信仰、福音主義が1730年頃から各地に普及し、罪と救済、社会と個人の規律の必要性を強調した。社会への関心以上に個人の私生活を重視し、世俗的な楽しみには懐疑的で民衆娯楽の伝統と衝突した⁶⁷⁾。そして福音主義が普及すればするほど、安息日（日曜日）の娯楽、さらに野蠻さを内包したもののほど、批判の対象にされたのである。

18世紀末つまり産業革命の始まった頃、伝統的娯楽への敵対が明らかに強まった。もはや多くの慣習的なスポーツにおける暴力（または半暴力）、「野卑」、「下劣」は容易には受け入れ難くなった。まさにこの世紀の半ばを過ぎて、これまで農民のそれらを支援してきたジェントリーの多くが、逆にそれを野蛮で、粗野で、非文明的なものに見なすようになったからである⁶⁸⁾。上流階級と下層階級とで共通する民俗ゲームが殆ど無くなり（1700年頃より相当減少したことは確かである）、ジェントリー、聖職者、大農場主は、古くからあった一般庶民との関係を拒絶するようになった⁶⁹⁾。その結果、先に見たように民衆が享受し続けていた慣習は、原始的で無秩序なもの、不道徳なものに見なされるようになったのである⁷⁰⁾。

民衆の余暇の性格が大変貌を遂げたのは、およそ1780年代以降に起こったか、少なくともこの時期にかなり加速したものであった⁷¹⁾。つまり産業革命の開始期である。囲い込みは1800年代中ごろ、開放耕地や共同地の第2次エンクロージャーにより、フットボールの場所が喪失した。さすがに、1845年の囲い込み法は、残る草地を人々の娯楽に保存すべきことを規定したくらいである。

当時労働者に対して、繰り返し規律が説かれたが、それは都市-工業化社会の産物であった。つまり農村的パターナリスティックの権威の影響も減少し、一方で労使の契約関係が細部まで支配しはじめ、階級対立が激化しはじめ、雇用も不安

定で、人口も密集し、社会統制の問題が強く意識されたからである⁷²⁾。

イギリスでは、18世紀の農業革命によって中世以来の三圃制（西欧中世の代表的な農法であり、耕地を3分し、冬畑、夏畑、休耕地として、順次充当する。これによって土地の生産力を高める。）による共同体中心の農業から、今や大地主による囲い込み（エンクロージャー）によって、農業においても地主と農業資本家と農業労働者から成る資本主義制度が確立し、伝統的な村の生活は根底から変わってしまった。

7.3 産業革命期：近代スポーツ誕生の第2期

マニュファクチュア期の蓄積と、先述した18世紀の諸戦争での勝利による更なる資本の蓄積、植民地獲得、そして科学革命を経て、イギリスは産業革命に突入した。イギリスだから可能なことであった。

村を追われた農民たちの大部分は、主として都市における鉱工業やサービス産業に吸収されて行った。1750年頃の大都市は人口70万人のロンドンだけであり、10万人を超える都市は他に無かったが、1830年にはマンチェスターは綿工業、リヴァプールは原綿の輸入と綿製品の輸出、バーミンガムは鉄工業・金属工業、リーズは毛織物工業、ブリストルは製糖業・タバコ工業、グラスゴーは綿工業と、各都市は特定の工業の発展と結びついて急成長した⁷³⁾。

産業革命は単に機械や技術の発明・応用によって特徴づけられるだけではなく、「分業と協業」の発展を基盤として、人々の社会生活を根本的に変革するものであった。先にE・ダニングが近代スポーツ誕生の根拠として述べた産業化と都市化は以下のように理解できる。産業化とは生産の技術過程と組織過程の高度化と複雑化であり、都市化とはそれに規定された社会の技術過程と組織過程の高度化、複雑化である。

生活の場が農村から都市へ移ったこと、しか

もその都市の生活環境こそまさに、資本主義社会の矛盾を最も明らかに現したものであった。労働者の貧困とは所得の低いこと、長時間労働による身体の磨滅、便所も水道も不備で不衛生な環境、狭い部屋での多人数の居住などとても人間らしい暮らしが出来ない劣悪なスラム街に住まわざるを得なかったことである。その上チフスやコレラ、結核、猩紅熱、ジフテリア、天然痘などの伝染病が絶えず流行する環境全体こそが、貧困の内実であった⁷⁴⁾。これらは19世紀末における公衆衛生や都市計画の必要性を産み出した。

19世紀初頭になると、労働者階級の都市への集積が進み、社会不安も大きくなった。この時点で、中産階級の福音主義者たちは労働者階級へ中産階級文化—図書、博物館、展覧会、音楽等—を普及させることによって、労働者階級の酒場や暴力行為やセックスからの離脱を意図した。それは一面で善意であったが、他面では社会統制や階級融和が意図された。労働での階級融和よりレジャーの方が容易であったからである。これは「合理的レクリエーション Rational Recreation」と呼ばれた。1850年当たりからの経済の好転と共にレジャー活動は新たな発展を見せた⁷⁵⁾。こうした中産階級の意図は確かに一部には成功した場合もあったが、基本的な階級的障壁を越えることは出来ず、最終的には失敗した。この合理的レクリエーションでは旧来の貴族スポーツ（乗馬、クリケット他）やブラッドスポーツは推奨されなかった⁷⁶⁾。これらの仕掛け人が酒や賭けの販売者だったからである⁷⁷⁾。

新たに権力を掌握しつつあったブルジョアジー（産業資本家）は、マニュファクチュア期の貴族・ジェントリーに代わる自分たちの文化と、世界の貿易、植民地支配、世界最強の海軍、国内の政治経済をリードする自分の子どもたちの教育を渴望した。そこで、新興のパブリッ

ク・スクールを建設した。その期待を背負ってラグビー校に採用されたT・アーノルドはその代表例である。当時のラテン語、古典中心の教育を時代の要請に対応してより実学的に改善したり、当時パブリック・スクールで一般的であった生徒の「自治」という名の放蕩を、寮や放課後の部活動でのプリーフェクト・ファギング制度（上級生による下級生の管理）として保障しつつ修正する代わりに、学校内での教師側の権威を回復させた。こうした教育改革は多くのパブリック・スクールの手本となった。その教育改革は1840年代に入ると、本丸とも言うべき民俗フットボールの改革へ向かった。ラグビー校での改善とルール化が行われた。これはラグビー・フットボールに連なるものである。この場合、ボールのハンドリングと脛を蹴るハッキングが維持された。特にハンドリングは、その後『トム・ブラウンの学校生活』（T・ヒューズ、1857）や逸話で語られる「ウィリアム・ウェップ・エリス少年の不名誉なる名誉ある行為」であったボールを持って走った行為が、当時の改革意識のアンテナに触れたことは容易に想像できる。

一方、伝統校であるイートン校などでも、ほぼ同時期に民俗フットボールの非暴力化へのルール化を行って、サッカーへと連なった。当時、民俗フットボールは数少ない集団的なゲームであった。そのゲームをスポーツ化することによって、自らの階級の要請する諸要素が形成されると考えた。これはブルジョアジーの子どもが多く入学する新興パブリック・スクールだけでなく、貴族・ジェントリーの子どもたちの通う伝統的なパブリック・スクールにおいても求められたことである。当時のブルジョアジーを中心とする支配階級は国外（国際的）では、世界の隅々に渡る植民地の統制、世界最強の海軍の維持、そして国内では急速化する産業革命による産業界と政治経済の運営、そしてそれら

を反映した社会の急速な変化を維持し、リードする心身ともに強健なリーダーの養成が求められた。これだけ強く求められたのは歴史上空前絶後の事であったと思われる。その基底に、産業革命の高度な「分業と協業」が規定した。そしてそこで求められる躍動性と組織性、それに協調性と強力なリーダーシップの要請に対応して、集団スポーツが最適な文化として注目されたのである。こうした社会的要請はこれまでの歴史には無かったことであった。ここに集団スポーツが求められた歴史的、社会的基盤があった。これが近代スポーツ誕生の第2期である。

民俗フットボールはその粗暴さ故に、多くの批判に晒され、野蛮脱却の社会風潮の下に各地で消失したが、しかしその集団性ゆえに、ブルジョアジーにとって多くの長所も内包したのである。民俗フットボールが地域で行われる場合、参加人数は事実上無制限で、さらに自分のゴールへボールを運ぶ方法として、畑を通るか、川を渡るか等々の大まかな戦術の作成は可能だが、ポジションを決めて、厳密な戦術で攻める、あるいは防御するという事は不可能であった。この点は高度に進んだ「分業と協業」の社会には不適合であった。その点はパブリック・スクールのグラウンドでの開催によって、コートサイズの決定、参加人数の限定などが次第に淘汰されていった。それに従って、ポジションとその役割も次第に綿密化され、個々の役割（分業）をしっかりと履行しつつ、仲間と協力してより高度な戦術を採りながら、勝利という共通の目標（製品の完成）に向かって進むこと（協業）は、工場や社会で進む「分業と協業」に対応して、ブルジョアジーの求めるスピード感、躍動感、統率性、そして集団的精神（チームワーク）を育成するものであった。

7.4 「分業と協業」と集団スポーツ

ここで「分業と協業」と集団スポーツとの関

連について少し検討する。「分業と協業」とは経済学や労働ないし産業組織論の用語であり、当然にそれらの領域では盛んに使用され、議論される。そして時にはそれ以外の領域でも議論されることはあり得る。しかし本稿ではスポーツとの関連での議論である。この点で先行研究は管見するところ皆無である。

7.4.1 個人スポーツと集団スポーツ

個人スポーツとは個人対対象物、あるいは個人対個人の競技である。そのため全ては個人の判断で対処される。しかし集団スポーツは個人の判断も重要であるが、それは他のチームメイトとの連携、コミュニケーションが前提である。そこには相手チームの動向判断もふくまれ、そのために個人の努力を行いつつ、相互の連携、全体の動向を常に意識、予測しながら活動しなければならない。これはスポーツにおける「分業と協業」そのものである。たとえ個が優れていても全体の流れとそこへ位置づけられなければならない。また全体の流れに個の力量が追いつかないと分業の責任を果たすことは出来ない。

また、当時は選択の対象ではなかったが、集団ゲーム（マスゲーム、集団ダンス他）との関連で集団スポーツを考えると、特徴がより明確になるかも知れない。集団ゲームはある程度、個の確立と集団のまとまりが求められる。しかしそこには対立するチームの存在はなく、競争心、対抗心はない。さらに攻守交代における臨機応変の能力等の必要性もないのである。

7.4.2 集団スポーツ内での「分業と協業」

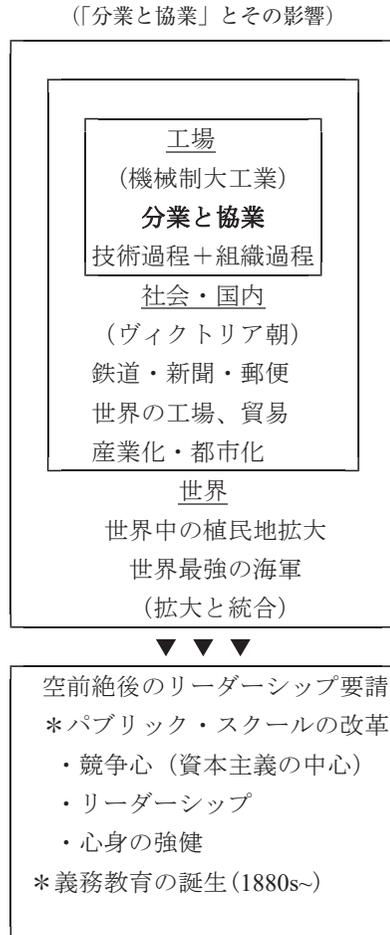
とはいえ、集団スポーツ内でも「分業と協業」の関係は多少のバリエーションが存在する。例えば、クリケット、ラウンダーズ（それらからアメリカで改変されたという野球）などのグループと、サッカー、ラグビー（同じくそれらから改変されたハンドボール、バスケットボール）などのグループである。クリケットはサッカーやラグビーよりも古い集団的スポーツだが、

攻撃、守備共に個人の「定位置」がある。打順は決まっているし、打者は全てを個人で対処しなければならない。守備位置もあらかじめ決められている。特にボウラーは試合の動向を大きく作用するポジションであるが、他の守備陣が直接に援助することは出来ない。この点で、確かに集団スポーツではあるが、攻撃、守備共に個人技、個人性がより一層強調される。

他方、サッカーやラグビーの場合、集団内での攻撃と守備位置は概ね決まっておりその役割を重点的に担うが、試合中はポジションが入り乱れて臨機応変に対応しなければならない。その点では個々人の役割をしっかりとこなしながら、集団の動向を判断しつつ他者の役割をも遂行しなければならない。全体の動向に個を位置づけながら、個と集団の動向をより包括的に抑え、個としての役割を即座に判断する必要がある。

以上から見る様に、大英帝国におけるブルジョアジーは当時既にあつた集団的であるクリケットにはそれほど注目しなかった。それは今述べたように、攻撃や守備において個人的要素をより多く内包していること、そしてR・ホルトが指摘したようにクリケットのチーム内が下層階級を内包しており、チームの団結手段としての要素に欠けていたこと、さらに当時のクリケットの試合が1週間も続いたこと等が、ブルジョアジーの要請するアスレティズムの高揚や大英帝国における指導者養成には不満を残したのである。その一方で、「民俗フットボール」を改善したサッカーやラグビーでは身体的強健さばかりでなく、競争心、闘争心、協調性、忠誠心、そしてそれらを統合したリーダーシップの養成により多くの可能性を求めたのである。

以上の関係を図表化したのが図表6である。中心に工場での分業と協業の発展があり、それに規定された社会、国家の発展がある。そしてそれは世界的規模で植民地支配、海軍他の軍事



図表6 19世紀中頃のイギリス

支配が、19世紀中頃からのイギリスに誕生した。そうした構造の全体が当時の支配層であるブルジョアジーの思考を規定し、その子どもたちの教育としてのパブリック・スクールでの教育改革をもたらした。そしてその中心に民俗フットボールを改変してラグビーやサッカーを産んだのである。そこで養成される、競争心、リーダーシップ、心身の強健さを期待したのである。

8. 資本主義はなぜ、集団スポーツを産んだのか

—分業と協業の発展に規定されて—

先行研究で見たように近代スポーツを産んだのは「近代化、産業化」によってである。時期

的に見てもそれは妥当であるが、その内実は不明であった。資本主義の何が可能にさせたのか、それ以上の追究はなされなかった。しかし今、工場制手工業、機械制大工業というマニュファクチュアと産業革命によるそれぞれの「分業と協業」(分業に支えられた協業)の発展段階が、根本的にはそれぞれに対応した身体活動と、スピード感、協調性、集団性、リーダーシップなどを内包した集団スポーツを求めたことが判明した。資本主義化による身体的、精神的、社会的(労働形態と社会関係)な要請である。特に高度に統制の取れた組織的な活動とリーダーシップの要請である。

確かに人類史において組織的活動、集団行動を必要としたのは原始社会の狩猟と戦闘、その後の軍隊である。軍隊はより強い戦闘行為のために、日常的な武闘訓練や隊列編成のトレーニングを必要とする。戦闘行為は、武器の発展と共に対戦の距離が開いてきた。鉄砲の発明によってその距離は数百メートル離れ、大砲ではもっと離れ、現代のミサイルでは数千キロメートルという距離であり、敵の顔を見ることもない。しかし近代兵器が発明されるまで、その戦闘行為は長い間最終的には一対一の武闘戦であった。そこでは武器は一つの殺傷道具として、完全に独立分業に置かれた。殺されたくなければ、あるいは傷つけられたいくれば、自分の持つ武器(道具)を駆使して、相手を殺傷するしかなかった。そこでの協業は無かった。そして、軍隊の、戦場での集団行動は、労働や日常生活での集団形成と結合することはなかった。

8.1 「創られた伝統」としてのスポーツ

「スポーツの組織化が19世紀の最後の10年に起こったという事実は証明するまでもない。英国においてさえ、1870年代以前には殆どなされなかった。サッカー杯は1871年、クリケットの州(カウンティ)選手権は1873年に遡る。』⁷⁸⁾

その前後の各スポーツ連盟の結成は以下のようになる。登山（1857）、陸上競技（1866年、以下同様）、水泳（1869）、ラグビー（1871）、ヨット（1875）、自転車（1878）、スケート、ボート（1879）、ボクシング（1884）、ホッケー（1886）、テニス（1888）、バドミントン（1895）、フェンシング（1898）などである。

ここに述べられているのは1840年代におけるサッカーやラグビーの誕生時のことではなく、それらを含めた各種のイギリス国内スポーツ連盟が結成された時期のことである。それらはブルジョア文化形成の一環として、創られた伝統である。またこの時期に見世物や事実上の大衆儀礼のための新しい建物が作られた。屋内、屋外のスポーツ競技場などがそれである。そしてウェンブレイ・カップ・ファイナルに（1914年以降）王室の人々が観戦するようになった⁷⁹⁾。当時既に労働者文化と言われたサッカーに王室が観戦したことは、サッカー人気は今や全国的になり、王室もその人気にあやかろうと、サッカーを活用しはじめたことを意味する。これもまた「創られた伝統」である。

8.2 ブルジョアの身体的・精神的要請との一致

こうしたスポーツの伝統を創造する背後には、既に見たように、資本主義的生産の基盤である「分業と協業」があり、その労働形態と社会組織の形成に対応できる機敏な身体と精神が要請されたのである。それらの能力は、単に労働力との対応だけでなく、帝国主義化し、植民地争奪と維持の視点から近代軍隊の重要性が増す中で、近代兵士の養成にも有用なものであった。近代軍隊の戦闘行為（鉄砲、大砲他、機敏な陣地戦など）に適応できる機敏な身体、計測・判断能力も求められたからである。その到達点として1880年代には労働者階級の子どもも対象として含めた近代義務教育制度が誕生し、労働者

と兵士の養成の基盤を形成した。とはいえ、第2次世界大戦の終了時まで、公立の義務教育学校では安価な体操が採用され、広大な土地や施設、長時間を必要とするスポーツは私立のエリート校のみで採用された。ここにもイギリスの階級の顕在化がある。

工場における「分業と協業」の集団工場での集団心と競争心そして愛社精神、また軍隊での愛国心（ナショナリズム）、忠誠心、服従心、決断力などを育成する教育の手段として、集団スポーツの「分業と協業」に依拠したアスレティシズムにおける集団心、克己心、忠誠心の育成そしてそれらの統合的な内容である個人と集団の関係を円満に調整するリーダーシップの育成とは共通する部分が多い。したがって、ブルジョアジーの教育要求としてパブリック・スクールで集団スポーツが重視されたのである。

大英帝国下、世界の隅々に渡る大量の植民地とその統括、最強の海軍の統制、産業革命における拡張する工場や企業の管理、それに規定された社会組織の拡大と複雑化とスピード化は、特に支配階級としてのブルジョアジーにとってあらゆる場面で求められたことである。このことはこれまでの歴史上どの時代、社会よりも強く求められた事である。この要求の一つの表出がパブリック・スクールでのアスレティシズムであった。そうした背景が、粗野と批判された民俗フットボールを改革し、より合理的なサッカーやラグビーなどの集団スポーツへと改善して、普及した歴史的、社会的な背景である。そしてその根底には資本主義を基軸で支えた「分業と協業」があったのである。

8.3 パブリック・スクールの役割

ブルジョアジーの時代的要請はその子どもたちの教育の場であるパブリック・スクールで象徴的に現れたが、それは遅ればせながら1880年代に誕生した近代義務教育の中でも、「イギリ

ス国民」の養成、特に大英帝国に挺身する近代労働者と兵士の養成においても求められた。イギリスの学校体育は同じようにアスレティシズムの下に置かれたのである。

1830年代、産業革命においてその第1段階である繊維関係の軽産業がほぼ完成した頃、次の鉄道の発達による産業革命の第2段階（重工業）が始まったが、この時点で生産の場と社会における「分業と協業」が高度な段階に到達し、その社会的要請も強固なものとなった。結果的にブルジョアジーの次世代の養成において、パブリック・スクールは集団スポーツという「創られた伝統」の実験場となった。これは新興パブリック・スクールだけでなく、貴族やジェントリーの子弟の多く通う伝統的パブリック・スクールにおいても同様であり、時代の社会的要請は同じであった。なぜパブリック・スクールが「実験場」になったかと言えば、パブリック・スクールがブルジョアジーの教育要請に対応するように教育改革を求められていたからである。カリキュラムにおける活用のない古典教育からより実用的な実学への改変、時代の集団性とリーダーシップの養成が特にその中心であった。特に後者についてはそこに「自治的」「集団的」に行われていた民俗フットボールがあったからであり、その改善されたサッカーやラグビーに彼らの要請が委託されたのである。こうして19世紀後半から20世紀初頭のアスレティシズムやマッスル・クリスチャニティの思想が、パブリック・スクールを中心とするイギリスの教育を席卷し、それは世界の学校教育に普及したのである。

注

- 45) 内海和雄『オリンピックと平和—課題と方法—』不味堂出版, 2012, p. 85
- 46) 同前, p. 83
- 47) E. J. ホブズボーム (浜林他訳)『産業と帝国』未来社, 1984, p. 64
- 48) 同前, p. 3
- 49) 同前, p. 13
- 50) 同前, p. 130
- 51) 同前, p. 132
- 52) E. J. ホブズボーム他『創られた伝統』紀伊國屋書店, 1992, pp. 9-10
- 53) 同前, pp. 18-19
- 54) D. キャナダイン「儀礼のコンテクスト, パフォーマンス, そして意味—英国君主制と「伝統の創出」, 1820-1977」, E. J. ホブズボーム他『創られた伝統』紀伊國屋書店, 1992, p. 171. ホブズボームは「創られた伝統」として1880年代以降のスポーツの動向を重視している。
- 55) K. マルクス『資本論』(二) 岩波文庫, 1969, p. 272
- 56) 同前, p. 254
- 57) 同前, p. 255
- 58) 同前, p. 301
- 59) 同前, p. 326
- 60) 同前, p. 328
- 61) Hugh Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution, c. 1780 - c. 1880*, Croom Helm London, 1980, p. 16
- 62) op. cit., p. 49
- 63) R. W. マーカムソン (川島他訳)『英国社会の民衆娯楽』平凡社, 1993, p. 148-151. 本書は全編18世紀のイギリスの民衆娯楽を記述している。
- 64) 同前, p. 154
- 65) 63) の p. 209
- 66) 同前, p. 246
- 67) 同前, p. 212
- 68) 同前, p. 326-7. 1750年前後にこうした事態は進行していた。
- 69) 同前, p. 327-8
- 70) 同前, p. 327
- 71) 同前, p. 339
- 72) 同前, p. 340
- 73) 角山 栄『産業革命と民衆』河出書房新社, 1975, p. 120
- 74) 同前, p. 201
- 75) 61) の p. 140
- 76) 同前, p. 106
- 77) 同前, p. 111
- 78) 52) の p. 451
- 79) 同前, p. 458